

# トーマスの厄難

～ロドリー村より～

浜田 薫

正確に言えば、トーマス・ラングイットの厄難はその前日の夜から始まっていた。

奥歯がずきずきと痛み、殆ど眠れなかった上に、翌朝には、頬が熱を持って腫れていた。それを朝一に見て知った母親から、教会の帰りにリンド医師のところへ行っといと命令され、痛みでただでさえ不機嫌だったトーマスは更に不機嫌になった。

父親から世話を任されている牝牛のネリーは、今朝に限って乳搾りの囲いに入るのを嫌がって頑固に言うことを聞かないし、いつもなら何ということもない薪割りも、小斧を振り落とすたびに奥歯が疼いて、いつもの倍時間が掛かった。

おかげで教会の教室に遅刻し、牧師先生から小言を言われた上に、計算の時間には宿題をまったくやっていなかったことが露見して、小一時間教卓の横に立たされた。また、そのことからかってきたチャーリーと休憩時間に殴り合いの喧嘩になり、結局、残りの時間一杯、普段彼が馬鹿にしている女の子たちからくすくすと笑われながら、バケツ両手にチャーリーと並んで立つはめに陥った。

チャーリーのパンチを受けたせいもあって、その頃にはもう奥歯がずきずきなんて可愛い痛みではなくっており、歯を抜くくらいなら骨を折ったほうがましという持論を掲げるトーマスであっても、もはや、日頃彼が悪魔の館と呼んで憚らないリンド医師の診療所に行くことを懊悩の末決意せねばならないほどだった。

そんなわけで、歯の痛みと抜歯の恐怖に半分泣きべそをかきながらも、勇気をかき集めて何とか諸悪の根源である歯を抜いてもらったトーマスは、抜歯後のまだ痛む頬を押さえて、不貞腐れた面持ちで帰途についたのだが、この日彼を待ち受けていた厄難は、まだ終わりではなかった。

トーマスが家に戻ったとき、母親は忙しそうな様子で、天日に晒した客間のベッドの掛布を取り込んでいるところだった。そして、トーマスを見ると、やはり忙しそうな口調で言いつけた。

「ああ、トーマス。一っ走り、マクファーレンさんのところへ行っ、急に親戚が来ることになったから、明日のお針の会は行けないって伝えてきておくれ」

「親戚？」

「ジェーン小母さんがいらっしゃるんだよ」

トーマスにとってその一言は、今日彼に降りかかった厄難の数々を全部まとめて差し出しても、お釣りが来るほどの意味合いを持つものだった。

ジェーン小母さんというのは、トーマスの父親の従姉妹にあたる初老の未亡人だ。裕福な商家だった生家の財産と、亡き夫が起こした事業で残した財産を継ぎ、現在はトラムのお屋敷で一人で暮らしている。

トーマスは、この小母が苦手だった。正直にいうなら、新年の贈り物をくれるでもないなら、一年に一度だって顔を合わせたくないほどだ。

それというのもこの小母が、必要以上に礼儀や行儀に口煩いからに他ならない。特に男の子に対しては、子供の頃にちゃんとした作法を身につけないと将来悪魔になるとでもいわんばかりに、服装から言葉遣い、姿勢、歩く時の足の出し方に至るまで、事細く指導してくる。しかも悪いことに、彼女は少しでも作法に欠ける子供がいたら、それを矯正するのが自分の義務だと強く思い込んでおり、トーマスはその義務を存分に果たすべき存在として、彼女の矯正者リストに名前を加えられていた。

「昼前に電報が来てね。なんでも、ブロッズタウンの知り合いの家のお嬢さんを一人連れて来なさるらし

い。肺が弱いとかで、お医者さまから、空気の綺麗な田舎で療養するようにつて言われたらしいんだけど、ジェーン小母さんが、それなら私の従兄弟がロドリーに農場を持っているからつて言いなすつたそうだよ。まったく、こつちの都合も何にもお構いなしなんだから……」

眉間に皺を寄せ、ぶつぶつと母親が不満を零す。そんな母親とはまた別の不満で心を一杯にしながら、トーマスは小母の突然の訪問予告に、思いつき顔を曇らせるしかなかった。

「本当にまあ、ここの馬車ときたら、荷馬車と変わらないんだから。すっかり腰が痛くなってしまいましたよ。私の記憶が正しければ、前回の訪問の際にも同じことを言ったはずだと思うんですけどね、アラン。あんたももういい年なんだから、年老いた従姉妹の体を気遣う優しさの一欠片くらい、持ち合わせていたっていいでしょうに」

何かの間違いが起こって小母が来られなくなりますようにというトーマスの願いも虚しく、薄暮の迫る頃、小母はトーマスの父親が運転する馬車に乗って、ラングイット家の母屋の玄関先に現れた。

着くなり、馬車から降りるより早く、嫌味たらしき文句をつけている声の様子から察するに、小母は最後に会った時と少しも変わらず元気らしい。トーマスは内心うんざりしつつ、出迎えに向かう母親に続いて玄関を出た。外ではちょうど父親が、小母さんが馬車から降りるのに手を貸しているところだった。

「ようこそ、ジェーン。お待ちしてましたわ」

「ああ、エミリー。お世話になりますよ」

両手を広げての母親の出迎えに、小母が軽いハグとキスで応えながら、しゃきしゃきと言う。小母は丸みのない痩せた枝のような体つきの人で、夫が他界して以来ずっとそうしているように、今日も黒レースをふんだんに使った豪華な喪服で全身を覆っていた。白髪混じりの髪は、後れ毛一つ許さぬふうに硬く鬘に結い上げられており、その上に、他所行きの羽飾りのついた帽子がピンできっちり止められている。

「道中お疲れになったでしょう。さあ、どうぞ中へお入りくださいな」

「お疲れなんてもんじゃないですよ、実際。道は悪いし、馬車にはクッションの一つもないし。よくまあ、骨がばらばらにならずに済んだものですよ。ああ、揺られすぎて目眩がする」

目眩がする人とはとても思えない機敏さで口を動かす小母に、トーマスは嫌々ながらも、懸命に笑顔を作って近づいた。

「いらっしやい、小母さん」

小母はトーマスに目をやると、ハグとキスを強要しつつも、早速顔を顰めた。

『『ようこそおいでくださいました』でしょう。やれやれ、この子はいつになったら、目上の者に対する正しい言葉使いが出来るようになるんだか。あんたの一番上の兄さんは、あんたの年にはもうきちんとした言葉で喋れましたよ』

そして言いながら、つぶさに点検するようにトーマスを上から下まで見回して、更に渋面になった。

「まあ、なんでしょうね、その身なりは。エミリー、他所の家庭のことでとやかくは言いたくないけれど、子供はもう少し清潔にさせるべきだと思いますよ。でもまあ、あなたも四人も子供を育てて、それも全員男の子ばかりじゃ、面倒になるのも頷けますからね。ええ、ええ、私がいる間は責任もって私がこの子の躰の面倒を見ましょう。いいえ、気にしなくていいのよ、それが私の果たすべき義務でもあるんですからね」

トーマスとその母親の名誉のために付け加えるなら、トーマスはけして、小汚い身なりをしていたわけではない。小母が来るにあたり、母親から晴れ着の次に上等な綺麗なシャツを着るように命じられていたし、トーマスもいつものように、前ボタンの上から三つは外して開けておくなんて真似はせずに、きちんと全部閉めていた。顔も手も石鹸をつけて洗い泥を落とし、髪だって、痛いのを我慢して梳かしたくらいだ。何も知らない村の人が、今のトーマスを見れば、何か特別な祝い事でもあるのかと勘違いしただろう。

とにかくこの小母は、何でもいいから文句をつけて、それを理由にトーマスに、自分が正しいとする作法を自ら叩き込みたいだけなのだ。

「トーマス。こっちに来て、荷物を運ぶのを手伝ってくれ」

小母の恒例の宣言——トーマスにとっては地獄の宣言——に母親が苦笑いし、トーマスが閉口する中、父親が口を挟んで寄越した。

トーマスは、これ幸いと小母から逃れて、父親のいる馬車の方に行こうとして、その時初めて、その女性を目にした。

彼女は、小母の背後に隠れるようにして立っていた。そして、トーマスと目が合うと、にこりと優しく目と口元を微笑ませたのだが、トーマスにはそれが、紺色とオレンジ色に染まった暮れなずむ空に浮かぶ夕星が見せた、一瞬の幻のように思えた。

「プリシラ、いらっしやい。エミリーを紹介するわ」

小母が手招きしてそう言い、実際彼女が動くまで、トーマスはその女性が人間だとはとても信じられなかった。

これほどに肌が白い人は見たことがなかったし、これほど見事な金髪も見たことがなかった。まるで熟れた小麦の穂のようなその髪は、小母とは違い、ボリュームを持たせるようにふんわりと緩やかに結われており、白いつばの広い帽子は小ぶりの薄いピンクや黄色のバラで優雅に飾られている。背はそう高くなく、体つきもほっそりとしているが、けして小母のように痩せた木の枝といった印象ではなく、柔らかな白の袖が膨らんだ訪問着のおかげもあってか、どこか、可愛らしい鈴蘭の花のような風情があった。

しかし、何より印象的だったのは、その大きな目だ。

やや紫色を帯びた青は、トーマスの脳裏に、以前牧師先生が見せてくれた図鑑に載っていた青金石を思い出させた。そして、その目が家の中の明かりを受けて煌く様ときたら、まさに宵闇に星が輝くようだった。「エミリー、こちら、ミス・プリシラ・ステイシー。プリシラのお父様は、ブロッズタウンに大きな紡績工場を三つも持っていらっしゃるのよ。プリシラ、こちら、ミセス・エミリー・ラングイット。私の従兄弟のアランの妻で……」

「トーマス。何をしてる。早く手伝ってくれ」

知らず知らずのうちに、ぼうっとして、小母が彼女のことを紹介するのを聞いていたトーマスは、父親の言葉にはっとして、馬車へ駆け寄った。

その夜、トーマスは前日の夜と同じように、ベッドに入ってもなかなか寝付けなかった。

と、言っても、歯の痛みが原因ではない。そんなものは、とうの昔に忘れきっていた。また、夕食の席で早速、小母からあれこれと作法について口喧しく説教されたからでもなかった。もちろん、小母の熱心すぎるほど熱心な説教のあれこれを思い出すとどっと疲れを感じたし、恐らく明日の朝食の席でも夕食の席でも、正確に言うなら小母が滞在する限りいつどんな場所でも、それが繰り返されると思うと、げんなりしたが。

だが、それ以上に、夕食の席で見たプリシラの優雅な動作や、控えめな受け答え、落ち着いた上品な笑い方などが、どういうわけか、頭の真ん中に釘で打たれたように張り付いてしまって、眠ろうにも目が冴えて眠れなかったのだ。

時既に深夜を過ぎており、家中みんなが寝静まっているというのに、胸の底らへんが妙にもぞもぞして、まったく落ち着かない。落ち着かないどころか、小母から紹介を受け、『よろしくお願いね、トーマス』と、微笑んだプリシラの顔や声を思い出すと、意味もなく枕に顔を突っ伏せ、ばたばたとものがきたい衝動にさえ駆られた。

小母が父親たちに説明したところによると、プリシラはトーマスの四つ上で、今年十八歳になるらしかった。また、幼い頃から体が丈夫な質ではなく、一年前に肺炎にかかってからは、特に弱くなって、心配した両親が主治医に相談したところ、空気の綺麗な田舎での療養を勧められたらしい。

彼女を見れば、病弱というのも頷ける話で、肌は白すぎて、見方によっては青ざめて見えるし、腰など折れそうなほどに細かった。

しかし、村の健康的な、言い換えるなら逞しい体つきの、そばかすだらけの女性たちを見て育ったトーマスには、プリシラのその白さも細さも、ひいては病弱というその体質すら、美の象徴のように感じられた。

トーマスは男ばかりの四兄弟の、少し年の離れた末っ子で、幼い頃から兄をはじめ、男の子とばかり遊んで育った。

村には良い遊び相手となる同じ年頃の女の子たちも当然いたが、木登りや駆けっこなどを好んだ彼にとって、ままごとや人形遊びをしたがる彼女たちは遊んでも退屈なだけでちっとも面白くなかったし、退屈しのぎにちょっと悪戯すれば、わあわあ泣いてこちらを悪者にしたてるしで、トーマスは女の子たちが、あまり好きではなかった。

成長するにつれて、そんな彼女たちもわあわあ泣くということとはなくなったが、今度はやけに偉ぶった生意気な態度で人に命令してくるようになり、そうかと思えば、呆れるほど馬鹿馬鹿しい噂や与太話に夢中になって、始終べちゃくちゃとうるさいしで、今やトーマスは、女の子たちを「軽薄でうるさいだけの偉ぶりがりや」と、すっかり馬鹿にしきっている。

そして困ったことに、彼のその幼い感情は、村の年近い少女たちだけに留まらず、未婚の若い女性全般に向けられている節があった。

ところがプリシラは、未婚の若い女性でありながら、トーマスの抱くそういったイメージとはかけ離れていた。

彼女は優雅で美しく、控えめで、言葉や仕草すべてに品がある。

これまでトーマスは正直なところ、『品』がどういうものなのか、よく分かっていなかった。小母はよく、トーマスの食べ方や喋り方に品が無いと嘆いては、「私の真似をなさい、いいですか。こうするのです」と、自らお手本役となって実演してくれもしたが、しかし、そんな小母の姿にトーマスは、多大な嫌気や、多少の滑稽さを感じることはあっても、『品』というものを感じたことはついぞなかったのだ。

しかし、今日プリシラを見てトーマスは、『品』というものがどんなものであるか、初めて理解した。

彼女は、——少なくともトーマスが考える限りでは——、母や小母、その他彼が知っている、年が近い女の子たちも含めて女性全員、誰も兼ね備えていない品格を、その細い体に空気のように纏っていた。

よく村の女の子たちが自分たちのことを指して、「淑女（レディ）に向かって何てことを言うの」とか、「淑女に対してその態度は間違ってる」などと言って意見してくるが、淑女という言葉は、プリシラにこそ相応しいものだトーマスは心底思った。そして、プリシラにこそ相応しいその言葉を、彼女たちが当然のように自分たちに当てはめて使うことが、神聖なものへの許しがたい冒涇のようにさえ思えた。

ブロッズタウンの上流階級の家生まれ、都会的で洗練されたプリシラが、ロドリーの女性たちとは違って見えるのはある意味では当然のことで、ましてやトーマスが最も馬鹿にしている同じ年頃の女の子たちとは、年齢も環境も何もかも違うのだから、本来なら同じ土俵で比べること自体間違いなのだが、残念ながらまだ人生の視野が広くないトーマス少年は、そこまでの考えを持つまでには至らなかった。

そうして、月が西の森へと静かに帰っていく頃、ようやく遅い眠りがトーマス少年の上にも舞い降りたのだが、その眠りの中で彼は、この世の宝である、この上なく美しいレディ・プリシラを守る勇敢な騎士、トーマス・ラングイット卿として、巨大な怪物相手に雄々しく剣を奮っていたのだった。

次の日の朝、トーマスは寝不足で頭がうまく働かず、つい小母の前で、ちぎることなくパンにかぶりつくという愚行をしてしまい、食べる行為そのものが嫌になるほど長い説教を受けたが、その後のプリシラの言葉で、そんな不愉快さなどいっぺんに吹き飛んだ。

「ねえ、トーマス。アランさんが教えてくださったのだけれど、あなた、牝牛の世話をしているんですってね。お邪魔でなければ、見学させてくださらない？」

窓から差し込む朝の光に黄金の髪を輝かせ、プリシラが優しく微笑む。トーマスは一瞬にして天の国にいるかのような気持ちになった。

が、しかし、すぐに小母が顔を顰め口を挟んだ。

「まあ、プリシラ。牛なんて見て気持ちがいいものじゃありませんよ。臭いし、汚いし」

「ネリーは別に汚くないよ」

トーマスは思わずむっとして、ネリーの肩を持った。父親が競売で買ってきて以来、トーマスが毎日世話してきた牛だ。侮辱されて黙っているわけにはいかない。

小母は聞こえないかのように、澄まし顔でティーカップを口に運んだ。そんな小母にプリシラが、遠慮がちに言う。

「でも私、一度も近くで見たことがないんですの。こちらに伺う途中で、放牧中の牛を何頭か目にしましたけれど、馬車の上からでしたし」

「いいんじゃないか。ブロッズタウンじゃ、こんな機会もまずないだろう。トーマス、案内してさしあげなさい」

父親が賛成したことで、この件は決まったものになった。

トーマスは晴れがましさで胸を反らせたが、小母は、ふんと肩を尖らせた。

「私は行きませんからね」

「誰も小母さんに来てなんて頼んでないよ」

「まあ、なんですか、トーマス。その口の利き方は」

つつけんどんなトーマスの物言いに、小母は声と皺のある目尻を釣り上げた。トーマスは、その顔を真っ直ぐ見て言い返した。

「小母さんが、ネリーを侮辱するからだ。小母さんだって、飼っている犬を臭くて汚いって言われたら腹が立つだろう」

トラムのお屋敷で飼っている二匹の小型犬を、小母は我が子同然に可愛がっている。それを踏まえた上でのトーマスの意見に、小母は一瞬、鯉のように口をパクパクさせたが、すぐに負けたといわんばかりに、上げた目尻を下げた。そして、やれやれとでもいうように、肩を竦めた。

「まったくこの子は、そういう口だけ達者になって。まあでも、そうね。今の確かに失言だったわね。いいわ、取り消します。たとえ事実であっても、あんたの前で言うべきことではなかったですからね。けれど、プリシラ。外に出るのなら、ショールを巻いて、それから日傘も持ってお行きなさい。直射日光はあなたの体には強すぎますからね。それから、トーマス。間違っても牛がプリシラに飛びかかることがないように、きちんと綱をしておくんですよ。私の犬たちなら小さいし問題ないけど、牛に飛びつかれたら無事では済まないですからね」

さも知ったふうな小母の言葉に、トーマスはちょっと呆れて、牛は犬みたいに飛びつかないよと喉元まで出掛かったが、賢明にもそれを口にはしなかった。

「こっちだよ」

ネリーの小屋へとプリシラを案内しながら、トーマスはまるで、王女の近衛兵になったかのように誉れ高い気分だった。

実際、両脇にダリアやリナリア、早咲きのコスモスと言った夏の花が咲き乱れる母親自慢の庭を、フリルのついた日傘を手に歩くプリシラは、庭園を散策する王女と言っても差し支えないほどに美しかった。

首元と袖口に白レースをあしらった薄い水色の服は、トーマスの常識からすれば普段着ではなくドレスそのものだったし、緩く編みあげられた髪から作為的に垂らされた後れ毛は、柔らかな巻き毛で、肩にかけたシフォンの白いショールの上にふんわりと優雅にかかっている。

昨日初めて見たときも、その美しさに驚かずにはいられなかったトーマスだが、改めて陽の光の下で見ると尚の事眩いばかりに美しく、もはや彼女は、女神が作りたもうた芸術品のように思えた。

「まあ、なんて可愛い目をしてるんでしょう！ まつ毛がすごく長いのね」

小屋に着き、ネリーを見たプリシラが、日傘の下から声を弾ませる。比較的年が近いトーマスと二人だけのせいか、その口調は少し砕けた、親しみやすいものになっていた。

トーマスは得意になって言った。

「ネリーは良い牝牛なんだ。大人しいし、乳もよく出るし。父さんはネリーを二十五フルソで買ったんだけど、四十フルソの値打ちはあったっていつも言ってる」

「乳搾りは、あなたがするの？」

「そうだよ」

「すごいね」

プリシラの心からの賞賛に、トーマスは得意満面で、ネリーを乳搾りの囲いの中に誘導した。内心でこっそり、昨日みたいに言うことを聞かなかつたら、もう燕麦をやらないぞと脅したが、そんな必要はなく、ネリーは素直に囲いに入ると大人しく乳を絞らせた。

「まあ、本当にミルクが出ている。すごいわ、トーマス」

「簡単だよ。君もやってみるかい？」

「え、いいえ。私は無理よ。犬や小鳥以外の動物になんて触ったことないもの」

トーマスはちょっと驚いて、プリシラを見た。

「馬は？」

「ないわ」

「じゃあ、馬車に乗るとき、どうやって馬に手綱をつけるの？」

「それは御者の仕事だもの。私たちがすることではないわ」

プリシラが当たり前のことを話すように答える。

トーマスは少し考えてから、また訊いた。

「でも、それって不便じゃない？ 御者がいなくなったら、馬車にも乗れないなんて」

「考え方によっては、そうかもしれないわね。でも、私たちが自分でするようになってしまったら、御者は仕事を失くしてしまうでしょう？ 人から仕事を奪ってはいけないわ」

「御者は別に、御者の仕事しか出来ないわけじゃないだろう？」

「それは勿論そうだけれど。でも、誰でも自分の仕事には誇りを持っているものではなくて？ 他に仕事があるからといって、その人が誇りを持って就いている仕事を奪うのは良くないことではないかしら」

プリシラの落ち着いた返答に、トーマスはすっかり感心してしまった。

「君は頭がいいんだね。綺麗なだけじゃなく」

そして感心のあまり、つい思ったまま口にしてしまった。

しかし、かあっと頬を染めて顔を逸らしたトーマスを気にすることなく、プリシラは、にこりと上品な微笑みをその口に浮かべて返した。

「そんなことはないわよ。あなたより数年早く生まれて、数年だけ長くこの世にいただけ。お父様の仕事や家のことを手伝って、牛の世話もきちんと出来るあなたの方がずっと立派だと思うわ」

気持ちの籠ったその声に、トーマスは照れて鼻を擦りながらも、気持ちを高揚させて、おどけて言った。「それ、ジェーン小母さんにも言ってくれない？ 小母さんのことは嫌いじゃないけど、行儀やら礼儀の作法はもううんざりだよ。トーマス、音を立ててスープを飲んではいけません！ トーマス、背筋をしゃんと伸ばしなさい！ トーマス、また『どうぞ』を忘れてますよ！」

小母の口真似をしてみせたトーマスに、プリシラが片手で口元を隠して、笑いを噛み殺しながら言う。

「ダッセル夫人は、あなたのためを思っておしゃってくださっているのよ」

「そうだとすると、ああもしつこくいちいち言われたんじゃな。苛々して逆に、すごく行儀悪い真似をしてやろうかって気持ちになるよ。それで小母さんが卒倒したらしたで、ちょっと面白いし」

「あら、そんなことを言ってはダッセル夫人が悲しむわ」

「別に悲しみやしないさ、怒りはするだろうけどね」

トーマスは軽く肩を竦めてみせた。プリシラは少し困ったように微笑みながら、優しく言った。

「確かに、正式な作法には細かくて面倒な面もあるけれど、作法というのは元々、相手への敬意を表すためのものなのよ、トーマス。ダッセル夫人はあなたに、誰に対しても敬意を払うことの出来る立派な紳士になってもらいたいのよ。私も、そういう人のほうが素敵だと思うわ」

プリシラのその発言——特に最後のほう——は、彼女が意図した以上の意味になって、大きな影響をトーマスにもたらすことになった。

彼女とのこの会話以来、トーマスは人が変わったように、小母の作法の手ほどきを真面目に受けるようになった。

注意されずとも、食べている最中に口を開けて喋らなくなったし、どんなにお腹が減っていても、皿の上のものを掻き込むなんて真似もしなくなった。家に入る前に靴の泥を自らちゃんと落とすようになり、顔も手も、面倒がらず毎日石鹸をつけて洗う他、髪にも毎日櫛を入れるようになった。ボタンも——少なくとも小母やプリシラがいる前では——きちんと全部閉めて過ごしたし、家の中で走ることはやめ、歩くときも出来るだけ静かに歩いた。

小母はついに自分の情熱が通じたのだと大喜びだったが、実際のところ、トーマスの行動はすべてプリシラのためであり、プリシラの『私も、そういう人のほうが素敵だと思うわ』という発言こそが彼の動機のすべてだった。

トーマスはもうすっかり、プリシラに夢中になっていたのだ。

プリシラは体の加減もあって、ネリーを見に行った朝のように、気軽に外に連れ出すことも出来なかったし、大体どんな時でも小母や母親と一緒にいるので、あれ以来二人きりで話すということもなかったのだが、それでも彼女が何かの折にトーマスに向ける上品な微笑みや、優雅な立ち振る舞い、また何より、花の精か星の精かといったその美しさは、トーマスの心を今や完全に支配していた。

そういうわけで、プリシラに相応しい紳士になるべく決意に胸を燃え上がらせたトーマスは、一週間もする頃には、食事の席に着く小母の椅子をひいてあげるという紳士っぷりに成長していた。

家の外でも、その紳士化計画は続行され、教会の教室に通う子供たちへと牧師先生の奥さんがパウンドケーキをこしらえれば、自分の分を小さい子にわけてやり、水汲みなどの重たい仕事をしている女の子を見れば、率先して手伝った。

トーマスのこの変化は当然、これまでの彼を知る人たちには驚きや怪しみの目で見られたし、チャーリーやディックなど仲が良い男の子たちの中には、頭でも打ったのかと正気を疑うものまでいたが、トーマスは、紳士たるもの常に堂々としてなくてははいけないと、周囲の奇異の目を気にせず頑張った。

トーマスの紳士的な行いは、二週間も経つ頃には村の評判になり、どこの家の親も、トーマスを見習いなさいと子供に言うほどだった。

小母は、トーマスの母親のところに服の型紙を借りに来たマクファーレン夫人からこの噂を聞き、喜びと誇らしさのあまり、ハンケチでそっと目頭を拭いながら、トーマスの母親に言った。

「夫が逝ってしまったときは悲しくて、私も一緒に逝ってしまいたいなんて思ったものだけど、長生きするのも存外悪いものじゃありませんね。トーマスが、あの子が村の子供のお手本になるなんて、こんなに喜ばしいことがあるんですからね」

小母はその夜、これ以上ない上機嫌で、トーマスが成人した暁には、小母の家で一番上等な銀の懐中時計を譲ると約束した。トーマスは降って湧いたその嬉しい約束に舞い上がりながらも、立派に成人した自分がその懐中時計を手に、美しいプリシラと寄り添い歩いている姿を想像し、その勝手極まる未来の夢に、遅くまで胸を沸き立たせていた。

プリシラがロドリーにやってきて、早くも三週間近くが経った。

今週末に、プリシラはブロッズタウンに帰る予定になっている。その事実はトーマスを落胆させたが、来

年の夏にも是非ここを訪れたいというプリシラの言葉に慰めを見出し、今からもう来年の夏を夢見て、母親から手渡された籠を片手に一人、轍が残る赤土の道を歩いていた。

空は過ぎ行く夏を惜しむように高く晴れており、爽やかな空気の中に、カケスの独特な声が響いていた。そして時折、籠の中で、キンスリーさんに届けるよう頼まれた、自家製の五年物の葡萄酒の瓶が二本、ぶつかりあって音を立てていた。

「あら、トーマス。どこ行くの？」

キンスリー牧場まで半分の道のりまで来たとき、四辻のブナの木の間から、聴き慣れた声がトーマスを呼び止めた。顔を向ければ、ベラ・バートリーという、トーマスと同じ年の女の子が、ちょうどトーマスと同じ方向に向かって歩いてくるところだった。

トーマスは年の近い村の女の子の中でも、とりわけベラには、好意的な気持ちを抱いていなかった。彼に言わせれば、ベラは「軽薄でうるさいだけの偉ぶりがりや」の頂点のような存在だった。また、幼い頃から利発で気が強く、トーマスが意地悪を言えば、トーマスの上に行く意地悪を言って返すし、わざと悪戯して痛い目にあわせれば、その仕返しに、けしてトーマスには真似できない巧妙なやり方で彼を酷い目に追い込んだりと、何歳の時の記憶を掘り起こしても、嫌な思い出しかない相手でもあった。

三週間前なら、もし話しかけられても、ろくな返事をしなかっただろう。だがトーマスは今、プリシラのために紳士になろうと燃えており、紳士であるからには、たとえベラ相手であろうと、その問い掛けを無視すべきでないと、トーマスはなるべく愛想の良い声で紳士的に答えた。

「やあ、ベラ。気持ちのいい午後だね。母さんから頼まれて、キンスリーさんのところに行く途中なんだ」

「まあ偶然ね。私も母さんから、キンスリーさんへの届け物を頼まれたのよ」

ベラは、自分の手にある籠をちょっとだけ上げてみせた。

そして、僅かに考えてから、提案を持ちかけるようにトーマスを見た。

「良かったら、一緒に行かない？」

「いいよ、ベラがそうしたいなら」

トーマスは軽く肩を竦めつつ、再び紳士的に答えた。その返答に、ベラは多少ほっとしたような顔をした。

実は、ベラの方もあまり、トーマスを好いてはいなかった。だがそれは、トーマスが女の子を馬鹿にしているからこそで、だからベラはわざと彼には厳しく冷淡に接していたのだが、しかし、ここ最近の彼は素晴らしく紳士的なため、ベラも気持ちを改めようと思っていたのだ。そして、この道のりがそのきっかけになったらいいなど、彼女は思っていた。

幼い頃からのやりとりを思えば、まさに犬猿の仲の二人だったが、互いに相手には言えない胸の内の事情によって、表面上は仲良く横に並んで、キンスリーさんの家を目指し歩き始めた。

最初はお互い、よそよそしかった。だが一緒に歩いているうちに、同じ村の同じ年の子供同士、すぐに気安く会話を弾ませ始めた。話題は主に、教会の教室での話や、終わりかけている夏への寂しさ、来月の収穫祭のことなど、当たり障りのない世間話的なもので、ベラが喋ったり、声を立てて笑ったりする中、トーマスも笑ったり喋ったりしながら、嫌な気持ちになることなく隣を歩いていた。

それが変わったのは、ベラがプリシラのことを口にしてからだった。

「そういえば、あんたの家のお客さん。たいそう綺麗な人ね。この前エマの家に行ったとき、偶然彼女もあんたの小母さんと一緒にマクファーレンさんのところへ来てらしたのだけど、あんなに見事な金髪は見たことがないわ。私、黒髪がこの世で一番綺麗だって常々思ってきたけど、あの人みたいな金髪だったら、黒髪にも負けないわ」

「プリシラの髪は世界で一番綺麗だ。黒髪なんか目じゃないね」

トーマスは誇らしげに言った。

ベラはそんなトーマスの様子は気にせず、その言葉尻だけを捉えた。

「そう！ 目！ あの目ったら、本当に素敵よね。ちょうど暮れ時の空みたいな色合いじゃない？ 綺麗でうっとりしちゃう。それに服も素敵。ビンズさんの話だと、彼女の服は全部最新の流行の型だそうよ。マクファーレンさん、早速一着借りて型紙を作らなきゃって張り切ってたけど、エマったら、お母さんの体型じゃ大して似合わないんじゃないかしらって言うのよ。私、いけないと思いながらもつい納得しちゃったわ。だってあんたのところのお客さんは、マクファーレンさんと違って、ほら、ものすごく痩せているじゃない？ 首も腰も腕も、びっくりするくらい細いし」

「痩せているんじゃないくて、プリシラは華奢なんだよ」

トーマスは少しむっとして言い換えた。

ベラは頷きながらも、深く気に止めることなく続けた。

「それに、ひどく色が白いしね。だからこそ、ああいう服が似合うんじゃないかって思うんだけど、でも、あの人はまだ少し日に焼けたほうがいいようにも思うわ。あまりに白すぎて、日陰に立つと幽霊みたいに見えるもの」

それは確かに浅はかな例えだったが、けしてそこに悪意はなく、ベラにしてみれば、ただの素直な感想だった。

しかし、トーマスは、かっとなって、大きな声でベラの言葉を撥ね付けた。

「誰が幽霊だ、それなら、お前なんかちんちくりんの小鬼だろ！」

ベラはびっくりしてトーマスを見、そしてすぐに言い返した。

「失礼ね！ なによ、急に何を怒ってるの？ 私、別に幽霊だなんて言ってないじゃない。幽霊みたいに見えるって言うただけで」

「お前のほうが失礼だろう！ 言っとくけど、プリシラは暗いところで見たって、すごく綺麗なんだからな、幽霊なんか見えたりしない！」

ベラの少しも悪びれない物言いにトーマスは、ベラを睨みつけて更に語気を荒くした。トーマスからすれば、あたかも美の女神のごとく崇拜しているプリシラへの侮辱は到底許せるものではなかったし、その憤りは自分への侮辱以上だった。

肩まで怒らせたトーマスのその剣幕に、ベラはますます驚き混乱しつつも、彼の怒りを理解しようとトーマスを見た。

もし、ベラがもう少し大人か、それか、鈍い少女であつたなら。また、もしくは、隣で怒っているのがトーマスでさえなければ、ベラもここで素直に謝って、注意深く他の話題に移ったかもしれない。

しかし、ベラは子供で、しかも敏い少女で、隣で怒っているのは他でもないトーマスだった。

「あんた、まさか」

行き着いた考えにはっとして、思わず口から出たベラの声には、その時はまだ、純粋な驚きだけだった。

しかし、その驚きはすぐに好奇心とからかいの気持ち、そして、呆れに変わった。

ベラはわざとらしく大きく肩で息を吐くと、白けたようにトーマスを見やった。

「そういうわけね。どうりで最近おかしいと思ったのよ」

「何がだよ」

「あんたの態度、言動、すべてがよ。大方どうせ、あの人に何か言われたんでしょ。紳士が好きとか何とか」

ずばりと言い当てられて、トーマスは耳まで真っ赤になった。それ見て、ベラは勝ち誇ったような、呆れたような顔をする。

ただでさえベラに対して腹を立てていたトーマスは、そんなベラの態度に更にむかつ腹を立てたが、頭に血が上りすぎて、言い返すに相応しい言葉が見つからなかった。そもそも、利口で口も達者なベラに、トーマスは口喧嘩で勝てた試しがないのだ。

トーマスは顔を真っ赤にしたまま、憤然として歩き出した。ここ最近していなかった大股歩きで、怒り任せに地面をどしどしと踏みつけていく。そんなことをしたところで、怒りは少しも溶けないのだが、そうするしか発散方法がないのだから仕方がない。

ベラは、ちょっと意地悪く笑いながら、その背に声を投げた。

「その怒り方からして、図星ね。分かりやすい奴」

「うるさい、ついてくるな」

「別にあんたについていってるわけじゃないわよ。私もキンスリーさんに用事があるんだから、仕方ないでしょ」

背を向けたまま暴言を投げつけるトーマスに、ベラが澄まし声で言って返す。トーマスは再び返す言葉なく、大地を踏み割らん勢いで歩いた。その振動で、籠の中の葡萄酒の瓶が、がちがちとぶつかりあう。

ベラはちょっと肩を竦めて、また口を開いた。

「それにしても、あんた、本当に馬鹿じゃないの。相手は、ブロッズタウンのお金持ちのお嬢さまなのよ？」

あんたがいくら紳士ぶったところで、本物の紳士に敵うわけじゃないじゃない」

「そんなの、分からないだろ。プリシラ、俺のこと立派だって褒めてくれたし」

トーマスは前だけ見て、ぶっきらぼうに言った。トーマスにとっては、それは宝物のように大事な秘密だった。だから本当は誰にも言うつもりはなかったし、言いたくもなかったが、こうなっては仕方がなかった。

だがベラは、いよいよもって、声を呆れたものにした。

「そりゃそうでしょうよ。滞在先の他人の家の息子を貶す客がいるもんですか。あんた、それくらいのことで、のぼせ上がったわけ？ まったくおめでたい頭ね。お医者さまっていう立派な婚約者がいて、春には結婚する人相手によくまあ、」

「…え？」

トーマスは、無意識のうちに振り返って、ベラを見た。

「え…？」

トーマスのその行動に、ベラも口を止め、無意識のうちに足を止めた。

「今、何て言った…？」

「……もしかして、知らなかったの？」

大きく目を見開いたベラの表情が、みるみるうちに青ざめたものになる。

しかし、トーマスにはそんなことを気にする余裕はなかった。ベラがたった今もたらしたその重大な情報で、頭が一杯だった。そんな話この三週間一度だって、聞いたことがなかった。

トーマスは、ベラを睨みながらも、微妙に力の入らない間抜けな顔で言った。

「嘘つけよ。そういう嘘は、悪い嘘なんだぞ」

「……嘘じゃないわよ。あんたの小母さんがマクファーレンさんと話してたもの…。…だから、式の前に体をきちんと治さなきゃって、そのためにロドリーに療養しに来なすったんだって、そう、」

「嘘だ」

ベラが全部言い終わるのを待たず、トーマスは決め付けるように強く言い放って、背を向けた。そのまま、ずんずんと足だけを進める。胸の中といわず体中で、いろんな感情が慌ただしく飛び交っていた。顔はしっかり前に向けていたが、その目は何を見ているのか、自分でもよく分からなかった。

ベラにはああ言ったが、ベラが嘘をついていないことは、トーマスにも嫌なほど伝わっていた。しかし、それを認めると、認めたくない事柄が変えようのない事実として、自分の中に刻まれてしまう。トーマスはそれが嫌で、あえて黙々と歩くことだけに集中しようとした。

一方ベラは、自分がしてしまった最悪の間違いを、どう修正したらいいのか分からずに、ただひたすらトーマスの背中だけを見て足を動かしていた。

トーマスのことは好きではないが、だからといって、こんなふうに傷つける気ではなかった。驚いたのとちよっとした好奇心、それに何より呆れの気持ちで、少し意地悪してやろうと思っただけだった。まさか、トーマスがそのことを知らないなんて、ベラには思いもよらなかったのだ。彼のことだから、知った上で自分のほうが婚約者より優れているはずだから選ばれると、そんな身の程知らずの愚かさで恋をしているのだと、勝手に思い込んでいた。

それがまさか、何も知らなかったとは。しかも、こんな意地の悪い形で、それを知らせてしまうなんて。

ベラは、ここ三週間のトーマスを思い出し、ぎゅっと強く唇を噛んだ。それから、何とかトーマスの背中を真っ直ぐ見たまま、震えそうになる声を叱咤して呼びかけた。

「……ねえ、トーマス」

「話しかけるな」

しかし、トーマスから返ってきたのは、にべもない言葉だった。ベラは、徐々に視界を歪ませていく涙に負けまいと、必死で声を出した。

「ごめん。私、てっきり知っているものとばかり…。ごめん、本当に知らなかったのよ。あんたが知らないってこと」

「話しかけるなって言ってるだろ！」

訴えるようなベラの声、トーマスは吠えるようにして遮った。

その怒鳴り声に、ベラの肩がびくっと揺れ、その拍子に目に一杯に溜まっていた涙が、一粒頬に落ちた。

トーマスは振り返ると、そんなベラを憎々しげに睨んで、低く言い捨てた。

「お前なんか大嫌いだ」

その後、トーマスはもう振り返ることはしなかった。砂埃をあげる勢いで足音を立てて、真っ直ぐキンスリーさんの家を目指した。

その背後で途方に暮れたように立ち尽くし、後悔に声もなく泣き続けるベラのことなど、そのときのトーマスには関係なかった。

マスには知らないことだった。

その日トーマスが家に戻ったのは、すっかり日が暮れた後だった。

使いに出たなり、畑の手伝いも放り出して食事の時間まで戻らなかったトーマスに、母親は小言を言おうと待ち構えていたが、勝手口からのっそりと入ってきたその姿を見るなり、目をまん丸にして小さく叫んだ。

「まあ、トーマス！ あんた、一体どうしたっていうの！」

その声に、居間にいた小母やプリシラも台所に顔を出し、トーマスを見て、母親と同じに目をまん丸にした。

トーマスはまるで、高い山の崖から転げ落ちた人のような酷い有様だったのだ。

シャツもズボンも泥だらけで、ぼろぼろに破れており、顔も首も手も足も、見える限り体中傷だらけで、鼻には鼻血の痕まであった。

「ああ、なんてこと！ 馬車に轢かれたのね、かわいそうに。怪我は？ 骨は大丈夫だろうね？ エミリー、すぐに医師に診てもらわなくては」

あまりの惨状に小母は気を動転させて、トーマスに駆け寄りながらそう言ったが、母親はさすが母親だった。最初こそ、思いもよらぬ息子の姿に仰天したものの、怪我の程度やその種類、また、不貞腐れた顔でむっつりと押し黙っているトーマスの様子から、何があったのか正しく見当をつけていた。

「喧嘩したのね、トーマス？」

それは静かな怒気を孕んだ声だった。

しかしトーマスは目線をあげることもせず、ぶすっとしたまま、無言で返した。小母が「そんな、まさか喧嘩なんて」と言わんばかりの顔で自分を見ているのが分かったが、今、小母や母の顔を見れば、敵意を込めて睨んでしまうのは間違いなかった。また、顔を上げれば嫌でもそこにプリシラの姿を目にしてしまうこともあって、トーマスは尚更頑なに床を睨み続けた。

そんなトーマスに、母親は心底呆れたふうに頭に手をやって、深いため息をついた。

トーマスが自尊心が強くなりやすい性質であることは知っていたし、小さい頃から腕白で、友達と殴り合いの喧嘩をして帰ってくることもよくあったので、母親には、小母のような信じがたいという気持ちはなかったが、しかしここ最近のトーマスの成長を小母同様に誇らしく嬉しく思っていた彼女は、無言で肯定するトーマスの姿に落胆を隠せなかったのだ。

「理由が何であれ、暴力はいけないと何度言えば分かるの？ 少しは大人になったかと思っていたのに。こんなぼろぼろにまるまで、考えなしに喧嘩をするなんて。その服を縫うのは誰？ その体を育てたのは誰だと思ってるの！」

母親の言葉は尤もで、全くもって反論の余地がなかった。トーマスの心に今更ながら羞悪が湧いたが、それは彼が受けた心の傷を埋められるほどには大きくなく、逆に余計、傷を刺激してしまった。

トーマスは傷だらけの汚れた両手を握り締め、きつとして顔を上げた。そして、その場にいる全員――プリシラも含めて――に向かって、憎しみをぶつけるように大声で言い放った。

「どうせ子供だよ、紳士なんて糞くらえだ！」

「トーマス！」

間髪入れず小母が卒倒しそうな声を上げる。トーマスはそれを無視して、力いっぱい床を踏み鳴らして部屋へと駆け込むと、殊更大きな音を立ててドアを閉めた。

血液が逆流しているかのように、心臓がすごい音で鳴っていた。トーマスは悔しさと苛立ちと悲しみ、ま

た罪悪感と羞恥心に、切れた唇を思いつきり噛んだ。それだけでは足りず、皮が剥け血だらけの拳を壁に叩きつけた。しかしどれほど体を痛めつけても、抉るような胸の痛みには敵わなかった。

見ないようにしていたのに、先ほど顔を上げた時に視界に入ってしまったプリシラの、驚き怯えたような顔が脳裏に過る。

鼻の奥がつんとして、力を込めていた目に涙が滲んだ。それを乱暴に腕で拭うと、トーマスは汚れぼろぼろになったシャツを脱ぎ捨て、ベッドに潜り込み、頭からすべてを追い出すようにきつく目を閉じた。

ベラを置き去りにする形で、キンスリーさんに葡萄酒を届けた後、トーマスは後から来るだろうベラと鉢合わせしないで済むよう、遠回りして別の道を通って帰った。叶うことなら二度とベラの顔を見たくなかった。しかし、その選択は結果的に失敗だった。

キンスリー牧場を抜けた先の教会の近くで、チャーリーと出くわしたのだ。

チャーリーはトーマスの良い遊び仲間であるが、同時に、しゅっちゅう喧嘩になる相手でもあった。また、チャーリーは、ここ最近のトーマスの変化によって一番被害を受けている人物でもあった。事あるたびに両親から、「トーマスを見習え」だの、「トーマスはあるにいい子になったのに」だのと、耳にタコが出来るほど小言を言われていたのだ。

そういうわけでチャーリーは、トーマスが見えた時から、何か一言嫌味を言ってやろうと思っていた。もしチャーリーが、人の表情からその気分を察し配慮するということにもう少し長けていたら、地面を睨みつけるようにして大股で歩いてきたトーマスを見て、下手に声をかけはしなかっただろうし、あるいは、何かあったのかと、友達らしい言葉をかけたことだろう。しかし残念ながらチャーリーは、配慮に欠けることでは天才的な子供だった。

チャーリーはそばかすだらけの、ちょっと上向きの鼻を更に上に向かせ、あざ笑うようにトーマスを見て言った。それが今のトーマスに、どれほどの不愉快さをもたらすかも知らずに。

「よう、ジェントルトーマス。今度は誰に紳士っぷりを見せつけに行くんだい？」

あっという間に、殴り合いの喧嘩になった。道の上で砂埃を盛大に立て、上になったり下になったりしながら、互いに本気で殴り合った。

いつもなら大抵、どちらかが鼻血を出せばそれで決着がつくのだが、今日はトーマスは、チャーリーが鼻血を出しても殴るのをやめなかったし、そうならばチャーリーもトーマスが鼻血を出してもやめる義理はないわけで、殴ったり蹴ったり、髪を掴んだり引っ掻いたり噛み付いたり、互いに怒り心頭で暴れまくり、窓から偶然その様子を見た牧師先生が血相を変えて止めに入らなければ、トーマスはチャーリーの腕の骨を折っていたかもしれないし、チャーリーはトーマスの耳を食いちぎっていたかもしれない。

しかし、牧師先生の出現によって、チャーリーは不承ながらも怒りを一先ず押さえたが、トーマスは、そうはいかなかった。

呼び止める先生の声を見捨てて駆け出すと、誰にも会わなくて済むだろう森の中に入り、木や草に八つ当たりしながら、辺りを歩きまわった。

何もかもが、気に入らなかった。プリシラが婚約していることも、それを両親や小母が自分には教えてくれなかったことも、気持ちをベラに言い当てられたことも、チャーリーの態度も。だが一番気に入らなかったのは、すっかりプリシラにのぼせ上がっていた滑稽な自分だった。

彼女に相応しい紳士になろうと努力したこの三週間を思うと、この世から消えてしまいたいほど惨めな気持ちになり、また同時に、自分が救いようなない愚者に成り果てたような嫌な思いにも駆られた。

そうなってくると、自分をそうせたプリシラを憎らしく思う気持ちも多少芽生えたが、彼女の美しい上

品な微笑みや、優しい言葉を思い出すと、トーマスには彼女を、家族やベラやチャーリーのように憎たらし  
く思うことはとても出来なかった。かといって、彼女が春には結婚することを考えれば、大声で喚きたく  
なるほど憤りが押し寄せてくるのも本場で、トーマスは愛憎と苛立ちを持て余して、森が夜の闇に沈む直  
前までずっと、一人で森の中をひたすら歩き回っていた。

結局、この夜トーマスは、喧嘩は勿論、『糞くらえ』という罵り言葉を口にしたことで、帰宅した父親か  
ら、パンとミルク以外の夕食はなしという罰と共に、明日一日ベッドから出てはいけないという罰をも仰  
せつかった。

その罰は、間違いを犯した者に、じっくり一人でその間違いについて考えさせるという目的を持つもの  
なのだが、実際、感情の氾濫で混乱した頭を整理するという点では、今のトーマスには打って付けのもの  
だった。

一通りの説教をして父親が出て行き、それと入れ替わりに母親が、バターをつけたパンとミルクだけの  
夕食を持って現れ、トーマスのぼろぼろになった服を手にも部屋を出て行ってから数時間。トーマスはベッ  
ドの中で、この三週間の自分を省み、荒れた感情に少しずつ整理をつけはじめた。

その頃には、衝動的な怒りは勿論、精神的動揺も多少は落ち着いており、トーマスは見慣れた部屋の暗い  
天井を見あげながら、比較的冷静に思考をまとめることが出来た。

そして、星の瞬きが弱まり、東の空がうっすらと白み出す頃、トーマスはこの一件に対する自分なりの答  
えを出し、満足とまではいかないまでも、気持ちを納得させることに成功した。ただし、それは周囲の大人  
が期待する「答え」とはちよつと違っていたが。

「おはよう、トーマス。朝食を持ってきてあげましたよ」

窓の外がすっかり明るくなった頃、小母が朝食を載せた盆を手に部屋に入ってきた。

「傷の具合はどう？ 一晩たって、少しは頭が冷えましたか？」

「うん、小母さん。俺、頭がどうかしてんだ」

トーマスはベッドの上で体を起こして、元気に答えた。

小母は片眉をあげつつも、多少安心した顔で、盆をトーマスに渡ししながら、いつもの調子で口を動かした。

「そう、それは良かった。けれど、『うん』ではなく『はい』で、『だ』ではなく『です』とおっしゃい。昨日のことは、まあ、あんたは男の子ですからね。男の子は喧嘩をするくらい元気があるのがちょうどいいという人もいますけど、私に言わせれば、殴り合いの喧嘩なんて乱暴なことは、いくら子供でも躰がなってないと思いますよ。二度とこのようなことがないように。それに、いくら喧嘩して頭に血が上っていたって、あんな下品な言葉を口にしてはいけません。あんな言葉は野蛮人が口にするものであって、紳士が口にするものじゃありませんからね」

トーマスは、早速パンを手に掴みながら、ちょっとだけ肩を竦めて返した。

「汚い言葉を言ったことについては謝るよ。でも小母さん。俺、もう紳士になるのやめたんだ」

「まあ、何を言い出すの、トーマス」

思わぬ発言に目を見開く小母に、トーマスはあっけらかんとした顔つきで、パンにかぶりつきながら説明した。

「だってさ、俺実際やってみて分かったけど、紳士って損だよ。お菓子もわけてあげなきゃいけないし、嫌な奴にも優しくしなきゃいけないし、いいことなんか一つもないじゃん。あ、一つだけあったや。小母さん、懐中時計くれるって約束してくれたもん。でも、紳士にならなきゃくれないんだろ？ どうせ」

「当たり前です。あれは、あんたが立派な紳士になるだろうと信じたからこそ、譲ろうと思ったものなんですから。あんたがそれをやめるというなら、あげません」

小母は、こう言えば、懐中時計欲しさにトーマスの気が変わるのではないかと思ったのだが、トーマスは口一杯にパンを頬張りながら、納得顔で頷いてみせただけだった。

「やっぱりね。ちょっと残念だけど、じゃあ、いいや。いらない」

「ああ、トーマス。どうしたっていうの。あんた、この数週間、あんなに立派だったじゃないの。どうして、いきなりそんなことを言うの」

ずずずと派手な音を立ててスープを飲むトーマスに、小母が当惑して、責め立てるように言う。

トーマスは、またちょっとだけ肩を竦めながら、飄々と言って返した。

「意味がないって気がただけだよ。俺、本当頭がどうかしてた。立派な紳士になったからって、俺が好かれるわけじゃないし」

「そんなことはありませんよ。立派な紳士になれば、みんなから好かれますとも」

「でもそれって、立派な紳士が好きなんであって、俺を好きなわけじゃないだろう？ たとえば、小母さんは立派な淑女だけど、小母さんの亡くなった旦那さんが、立派な淑女が好きなんであって、小母さん自体は別に好きじゃないって言ったら、小母さんはどう思う？ もちろん、そんなことはないだろうけどさ」

その例えに小母は一瞬唾然としたものの、すぐに顔を顰め、反論すべく口を開きかけたが、続けてトーマスが言った言葉に、返す言葉をすっかり失ってしまった。

「大体、紳士じゃなくたって、立派な人は沢山いるよ。人の何を立派だと思うかは、人それぞれその人次第なんだし、結局大事なのは、その人が生まれ持った資質なんじゃないかなあ。とにかく、俺は俺が生まれ持った資質を大事にするよ」

そうして、トーマスの三週間に渡る紳士化計画は終わりを告げた。

と、言っても、それはトーマスの中のことで、小母の熱心すぎるほど熱心な作法教育は、その後も何も変わらなかったが。

また、何故彼女が婚約していることを誰も教えてくれなかったのかという不満も、最初の晩の夕食のあと、小母がその話題を出したとき、トーマスは小母に頼まれて膝掛けを取りに行っていて、話を聞き逃しただけということが判明し、何とも言えず気が抜けた。そもそも、最初から知っていたら何か変わっていたのかという疑問に答えを出すことは不可能で、だからトーマスは、この不満についてはもう考えないことにした。

一方、プリシラへの気持ちはまだ、痛みを伴って胸の中に燻っていた。

だがトーマスは、その気持ちにも自分なりの答えを出していた。

それは、自分は優雅さや品といった資質には恵まれなかったが、プリシラはそれらを持って生まれており、人は結局、同じ資質を持った相手と結ばれる方が何事も上手くいくはずで、きっと彼女の婚約者はその資質を兼ね備えているのだろうから、彼女の幸せのために自分は身を引こうという、——身を引くも何も全く相手にされていないという事実はさておき——、なかなか健気で男らしいものだった。

この答えのおかげで、トーマスは残る日数、プリシラを見るたびに胸が裂けそうに傷んでも、比較的に感情的にならず、優しく彼女に接することが出来た。とはいえ、最後の日の前日の夕方、ネリーに挨拶したいと言ったプリシラと二人で牛小屋を訪れたとき、彼女が首にかけたダイヤの婚約指輪——婚約者の祖母の指輪なのだが、プリシラの指には大きすぎて、ネックレスにして持っている他ないらしい——を、こっそり宝物のように見せてくれたときには、思わず嫉妬にかられて、「ダイヤって思ったより綺麗じゃないね」と、心にもない意地悪を言ってしまったが。

しかしそれでも、帰る当日の別れ際、プリシラがトーマスの頬に親しみの籠ったキスをくれたときには、トーマスも一応は、彼女の幸せを素直に願うことが出来た。

さて、その後トーマス少年はすっかり三週間前の彼、つまり、元の彼に戻ったわけだが、この三週間の影響はこの時既にもう、彼の生活に幾つかの大きな爪痕を作っていた。

まず牧師先生から、喧嘩のことで、その後呼びかけを無視して逃げたことでお説教を食らい、罰として十日間の居残り掃除を命じられた。喧嘩の相手であるチャーリーとの仲直りにも時間が掛かったし、そのために、宝物で一番のお気に入りだった船の模型の玩具を手放す羽目にもなった。

また、一度紳士的な良い子の顔を見せたことによって、それまで彼が普通に行ってきた小さな悪行——宿題を忘れたり、女の子を馬鹿にしたり、盗み食いをしたり——をちょっとならただけで、今までと違い、激しく厳しい批判の目を周囲から向けられるようになってしまった。これはトーマスには、大変生きにくい困った問題だった。

そしてまた、小母は小母で、彼がやれば出来ることを知ってしまったために、これまで以上に作法教育に熱心になった様子で、来年の新年の贈り物には、分厚いマナーブックを贈るという手紙を書いて寄越し、トーマスを心の底からげんりさせた。

しかしながら、そういった爪痕も時間が経つと薄れていった。

村の人も小母も誰もみんな、赤ん坊の頃からトーマスを知っていたし、トーマスは元々けして紳士的な男の子ではなかったから、みんな元に戻った彼を受け入れるのに大して苦労も時間もかからなかったのだ。

ただ、ひとつだけ、時間が経っても消えない爪痕があった。ベラである。

ベラはあれ以来、トーマスを避けるようになっていた。

教会の教室で一緒になっても、必要がない限りトーマスの傍に近づかなかったし、子供同士大勢で喋っている時でも、ベラはけして、トーマスに直接喋りかけるということをしなくなった。その上、以前なら、トーマスが教会の掃除当番をさぼったり、小さい子や女の子に意地悪をしたりしたら、それに対し文句を言ったり制裁を加えたりするのは大体いつもベラの役目だったのに、ベラはどうやら、その役目をも放棄したらしかった。

トーマスの方も、ベラにはあまり関わりたくなかったから、それならそれで一向に構わなかったのだが、しかし、たまに何かの弾みで目があったりした時に、ベラが辛そうな、酷く暗い表情でさっと顔を逸らすのが、どうにも気に入らず、かと言って、自分から話しかけるのも癪だして、トーマスはその都度、顔を逸らしたベラをむっつりと睨みながら、一人、苛々をただ持て余すしかなかった。

(了)

トーマスの厄難 ～ロドリー村より～  
<http://p.booklog.jp/book/96852>

著者: 浜田 薫  
著者プロフィール: <http://p.booklog.jp/users/nococococo/profile>

感想はこちらのコメントへ  
<http://p.booklog.jp/book/96852>

ブックログ本棚へ入れる  
<http://booklog.jp/item/3/96852>

電子書籍プラットフォーム: ブクログのパバー (<http://p.booklog.jp/>)  
運営会社: 株式会社ブクログ